

ひたちなか 埋文だより

62



解説パネル 毎年8月に実施している博物館実習では、実習の成果としてミニ企画展の企画と展示を行っています。2024年度の実習では、実習生が1人だけだったので常設展示品の解説パネル製作を行いました。課題として、各時代ごとにトピックスを見つけて、その解説パネルの製作をお願いしました。その結果、10枚の作品が完成しました。パネルには展示している土偶をキャラクターとして登場させ、ふるさと考古学講座の子どもたちと考えた「どぐっち」という名前をつけました。実習生がスマートフォンのアプリを駆使してイラストを描き、パソコンでパネルを製作していく姿には、世代の違いを感じました。(2024.8.25)

CONTENTS	第21回企画展 装飾古墳の世界2 - 虎塚古墳国指定50周年記念 -		
	公開講座「ひたちなか市の考古学」第17回 装飾古墳の世界2		
	特集 十五郎穴横穴群国指定・虎塚古墳国指定50周年記念シンポジウム		
	「私的茨城考古学外史-遺跡・人 出会いと別れ-」 第11回 発掘三昧への道 県内編6 (瓦吹 堅)		
	横穴墓を歩く⑬ 柏谷横穴群 (戸田 英佑)		
	ワンケース・ミュージアム 62 土器に記された古代人名	のぞき見、展示室⑨ 石匙	
	歴史の小窓⑫ 瓦に刻んだ名前	埋文センターの日々 2024 後期	ほか

第21回企画展

装飾古墳の世界2

— 虎塚古墳国指定50周年記念 —



虎塚ちゃん

2025年2月8日(土)～5月11日(日)



虎塚古墳を中心とした装飾古墳についての展示は、二〇〇九(平成二一)年度にひたちなか市埋蔵文化財調査センター第四回企画展として開催しました「装飾古墳の世界」があります。それからすでに一五年が過ぎました。茨城県内ではその後も新たな装飾古墳は見つかっていませんが、研究などにより新たな事実は明らかになっていきます。

今回の企画展では、前回の展示に新たな事実を加えた内容としました。また、震災復興の関連で発掘調査されました宮城県山元町の合戦原横穴墓群で新たに確認された線刻壁画のほぼ実物大の実測写真を展示し、それに関連して茨城県内の線刻の装飾古墳も取り上げました。

もう一つのテーマとして「虎塚古墳国指定五〇周年記念」展示として、発掘調査当時の日誌や図面、紹介記事などを公開しました。今回の企画展のポスターは、それを意図したものとなっています。ここでは、はじめに虎塚古墳国指定五〇周年記念展示を紹介して、次に茨城県内の装飾古墳について記述します。

虎塚古墳国指定五〇周年記念展示

虎塚古墳の壁画は一九七三年九月一二日に確認されました。発掘調査は明治大学の大家初重先生と小林三郎先生を中心に、明治大学や茨城キリスト教大学などの学生が従事しました。

展示した図面は、明治大学に保管されてい

る石室の奥壁と左右側壁の実測図です(図1)。石室の実測作業は九月一七日から一九日にかけて実施されました。石室内での実測作業は、湿度の管理を徹底していたため、何回も中断しながらの大変な実測だったそうです。そんな大変な中でも、図面のおちこちに詳細な観察記録が書き込まれていて、そこからは貴重な壁画を前に実測をした担当者の熱意が感じられます。また、実測終了後には、透明なセロファン紙*を使って文様の模写も行われています(図2)。

虎塚古墳の調査を担当した大家初重先生と小林三郎先生のご家族からは、虎塚古墳に関する資料などをひたちなか市にご寄贈いただきました。そのなかから、一九七三年の第一次調査時のノートと、虎塚古墳の最終報告書の原稿を展示しました。

調査ノートを見ると、大家先生のものには、色えんぴつを使用した詳細な調査の様子が記録されています。小林先生のものには、壁画が確認された一二日のページに「☆太陽光に輝く壁画」との書き込みがあり、そこからは壁画確認時の感動が伝わります(図3・4)。両先生の一二日以降のページは、それ以前のページと比べて極端に書き込みが少なくなります。そこからは、壁画確認後の関係機関との交渉や壁画保存への対応など、ノートがとれないほどの忙しさであったことを読み取ることができます。

勝田市史の別編として一九七八年に刊行した

*壁画を模写したセロファン紙も明治大学から借用しましたが、劣化の恐れを考慮して展示はしませんでした。

虎塚古墳の最終報告書の原稿は、小林先生の寄贈資料の中にありました。展示した部分は、大塚先生、小林先生、茨城県キリスト教大学の



図2 奥壁のセロファン紙の模写図

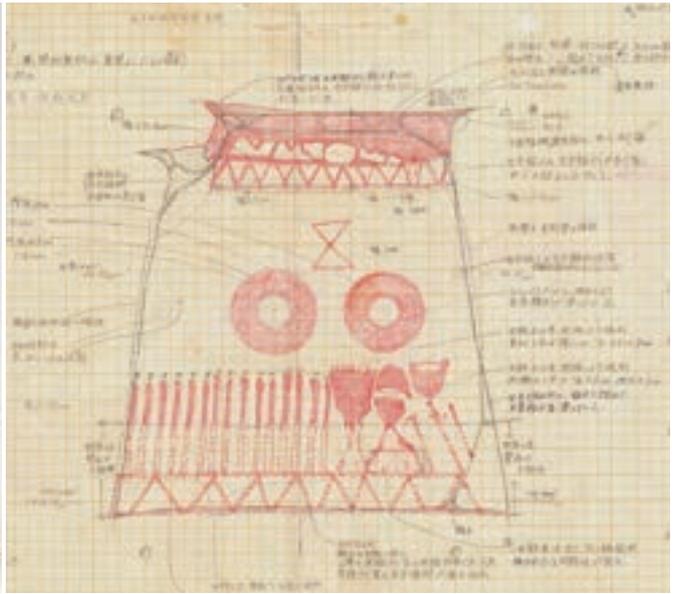


図1 奥壁の実測図（一部）

志田諄一先生、指導員の川崎純徳先生かわさきすみみのりの執筆原稿部分です。また、印刷所に入稿した壁画図版のトレース図も含まれており、その一部も展示しました。

これらのほかに、明治大学が所蔵している一九七三年刊行の虎塚古墳の第一次調査の概要報告書の大塚先生の原稿も展示しました。

現在の報告書はパソコンによって作成される

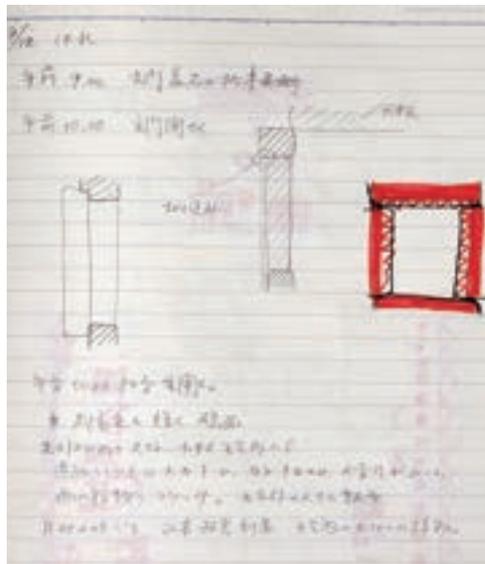


図4 小林三郎先生調査ノート
(1973年9月12日壁画確認時)

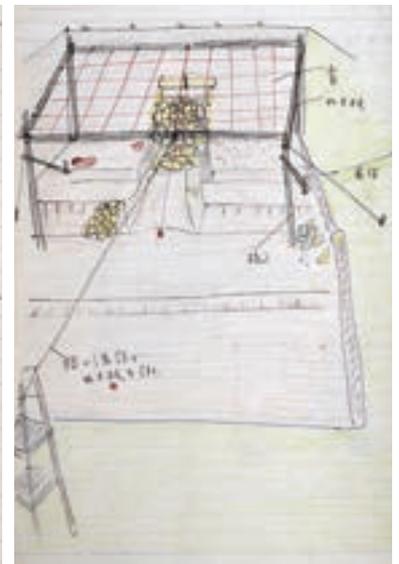


図3 大塚初重先生調査ノート
(1973年9月8日羨道部の調査)

一八基という数は、一九八三（昭和五八）年の桜川市花園古墳群第三号墳（図7）が確認されてから変わっていません。ただし、最新機器による調査などにより、前回の企画展から新たに判明したことはあります。今回の展示では、最新の状況を踏まえて、県内の装飾古墳について紹介しました。ここでは、展示した解説パネ

九基ある古墳の墳形は、前方後円墳が二基、円墳が三基、方墳が二基、多角形墳が一基、不明が一基です。ちなみに、東日本の彩色のある装飾古墳で、高塚古墳の形態のものは茨城県にしか存在しません。

茨城県内には、古墳が九基、横穴墓が九基の計一八基の装飾古墳が確認されています。このなかには後世に追加・落書きされた可能性があるものを含むため、確かなものは彩色のある八基と線刻のみの三基の合計一一基と考えられます。その分布は、南は霞ヶ浦周辺から北は日立市域まで、一つの地域に集中するのではなく、県内各地に散在します（図10）。時期については、六世紀後葉に出現し、七世紀中頃まで築造されます。

茨城県内の装飾古墳

ものが多く、手書きの原稿はほとんどありません。展示した手書きの原稿からは、文章の推敲や校正など報告書作成の苦勞の跡が読み取れます。

公開講座「ひたちなか市の考古学」第十七回
装飾古墳の世界2

令和七年二月一五日から三月八日に、公開講座「ひたちなか市の考古学 装飾古墳の世界2」を開催しました。講師には、装飾古墳や壁画の研究者をお招きして、最新の研究成果をもとに、装飾古墳についてご講演を頂きました。
 なお、今回の講座の内容については、後日、記録集を刊行する予定です。



月/日	演 題	講 師
2 / 15 (土)	壁画と保存	筑波大学 谷口 陽子 氏
2 / 22 (土)	東北地方の装飾古墳	宮城県山元町教育委員会 山田 隆博 氏
3 / 1 (土)	装飾古墳と世界の装飾墓	東京国立博物館 河野 一隆 氏
3 / 8 (土)	茨城の装飾古墳	(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 稲田 健一



東京国立博物館
 河野 一隆 氏

「法隆寺の金堂壁画や鳥取県上淀麿寺の壁画は、飛鳥時代の仏教絵画で、例えば高句麗から絵師が渡ってきて描いた。その延長線上に奈良県の高松塚古墳やキトラ古墳も成立してくるわけです。しかし、それとは全く没交渉の日本固有のものであるというのが九州の装飾古墳なんです。それは東日本の装飾古墳と同じです。」



宮城県山元町教育委員会
 山田 隆博 氏

「東北地方の装飾古墳は、阿武隈川から北、現在の宮城県の地域ですと、丸とか記号的なものが多い特徴がみられ、阿武隈川から南側、福島県の方に入ってくると文様のバリエーションがどんどん増えてきて、特に浜通りは人物、動物的なものの要素が多く描かれるのが特徴なんじゃないかなと思っております。」



筑波大学
 谷口 陽子 氏

「虎塚古墳の壁画は、ただ岩を削って絵の具をペット塗ったんではなくて、白いモルタルを塗って表面を平滑にした上に、赤色の顔料で絵を描いている。そういう意味では、世界の壁画と同じできちんとした壁画構造を持っています。このことから、非常に重要な遺跡であると言えると思います。」

歴史の小窓 その三二

瓦に刻んだ名前



この瓦は鷹ノ巣遺跡三三号住居跡のカマド脇から出土した「山田文母子夜児」文字瓦です。焼けた粘土が付着していたので、カマドの資材として用いられたものです。遺跡脇の本郷川の谷をさかのぼると原の寺瓦窯跡に至りますので、瓦窯から住居に持ち込まれたものと考えています。

出土した当時、国立歴史民俗博物館に平川南先生を訪ね、「山田」は郷・里・村などの地名ではないかとお教えいただきました。「文マ」(文部)は、手元にあった『日本古代氏族人名辞典』をみると、代々文筆の業務を職とした、百済系氏族の文部氏と書かれています。

奈良時代前半の達筆な文字、瓦生産と鷹ノ巣遺跡との関係など、この文字瓦については検討する余地がありそうです。(佐々木義則)

参考文献 稲田健「ほか二〇〇八『鷹ノ巣』第2次調査の成果」、『日本古代氏族人名辞典』吉川弘文館一九九〇



静岡県田方郡函南町
柏谷横穴群

戸田 英佑
(函南町教育委員会)

(あの世)を隔絶しました。埋葬された人の近親者が亡くなった場合、この閉塞石を取り除けば、同じお墓に埋葬することができず。こうした方法で後から埋葬されたものは追葬と呼ばれます。発掘調査では、時期の異なる遺物が出土することなどから追葬が行われたかどうかがわかります。柏谷横穴群が形成された時期は、北伊豆の横穴墓の中では最も古く、六世紀末に初現の横穴墓が造られ、その後約二百年間にわたってお墓が営まれました。一番新しい最後の埋葬の頃、八世紀末から九世紀初頭には火葬も行なわれました。

そしてそこに埋葬された人は、それぞれの集落に住んでいた人々のうちの、指導者の人たちと考えられています。亀甲片(古いに使用した亀の甲羅)が出土していることから、卜部との関連も指摘されています。

このように柏谷横穴群は、横穴墓を研究することとは無縁のこと、伊豆国における古墳時代後期から奈良時代にかけての、墓制、集落を含めた社会制度全般の歴史を解明するうえで、極めて重要な遺跡として高く評価されています。

柏谷横穴群は、東西六〇〇m、南北二五〇mにわたって三〇〇基以上が造られたと考えられている静岡県内で最大規模の横穴墓群です。現在そのうちの一部が国の史跡に指定され、指定地内には二〇〇基に近い横穴墓があると考えられています。横穴墓が造られている地質は、箱根火山の噴火のときに流れ出た「箱根火山新期軽石流」と呼ばれる軽石を主体としているため、横穴墓を加工しやすい反面壊れやすい特性もあります。

横穴墓は、遺骸を納める「玄室」と呼ばれる部屋と、供養祭のようなことが行われた「墓前域」(前庭部とも呼ばれます)、玄室と墓前域をつなぐ通路の「羨道部」に分かれています。時代が新しくなると玄室と羨道の区別がはっきりしない形に変化していきます。

玄室の入口は、閉塞石と呼ばれる河原石を羨道部に積み上げて塞ぎ、現世(この世)と黄泉の国

は、大きく五地区に、各地区はさらにいくつかのグループに分かれています。こうした横穴墓の分布は、広大な平井の丘陵上に展開された数多くの集落遺跡のそれぞれの墓域としてとらえることができます。



写真1 整備された中央の一群



写真2 現状保存の一群

十五郎穴横穴群国指定・虎塚古墳国指定50周年
記念シンポジウム

虎塚古墳と十五郎穴の今 そしてこれから

令和7年2月8日(土)開催



令和六年二月二日に、十五郎穴横穴群が馬渡埴輪製作遺跡(昭和四四年登録)・虎塚古墳(昭和四九年登録)に続き、市内で三例目となる国指定史跡に登録されました。また、同年一月二三日には、虎塚古墳が国指定から五〇周年を迎え、さらには勝田市と那珂湊市が平成五年に合併し、ひたちなか市となり三〇年という節目を迎えました。このような記念すべき年に、ひたちなか市誕生三〇周年事業の一環として、シンポジウム「虎塚古墳と十五郎穴の今そしてこれから」が令和七年二月八日(土)にひたちなか市文化会館の小ホールにて開催されました。会場には市民の方をはじめとし、茨城県内外の遠くからも足を運んで下さった方々もおり、総勢三〇四人もの来場者が集まり、シンポジウムは大盛況となりました。

シンポジウムの司会を務めたのは、古墳の研究や虎塚古墳などの県内の古墳の普及活動をされている、大学生の大内みなみさんです。最初に開会の言葉として、大谷明市長のあいさつがありました。市長は子供のころに十五郎穴へ遊びに来ており、昔から馴染み深い場所であったことを話されました。また、来賓あいさつとして文化庁の文化財調査官で



→大谷明市長開会のあいさつ

ある大澤正吾氏が登壇し、十五郎穴横穴群の国指定史跡登録についてのお言葉がありました。

午前の部では特別講演として、以前文化庁に在籍されていた、皇居三の丸尚蔵館学芸部長の建石徹氏による史跡保存の歴史と実際とこれからについて、文化財保護法における活用部分から見た、虎塚古墳での取り組みへの評価についてお話しがありました。第二講演では、長年に渡り虎塚古墳の保存について尽力されている、明治大学名誉教授の矢島國雄氏による、虎塚古墳の保存と公開五〇年の歩みについて、装飾壁画の発見から保存・一般公開にいたるまでの成果と現状の課題についてのお話しがありました。お昼休憩を経て、午後の部では最初に昭和四八年に実施された虎塚古墳の発掘調査や壁画発見後の一般公開の様子を記録した映画を上映しました。そして第三講演では、立正大学名誉教授の池上悟氏による十五郎穴横穴群の価値について、全国の横穴墓と比較した際のその重要性のお話しがありました。第四講演では、明治大学文学部教



会場の様子



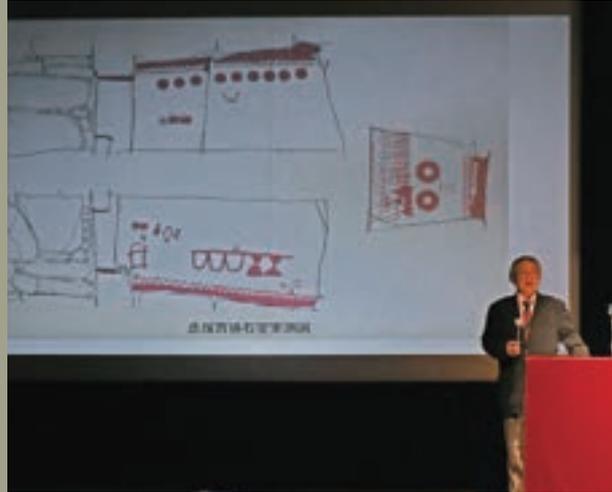
佐々木憲一氏



建石 徹氏



田中 裕氏



矢島國雄氏 講演の様子



池上 悟氏



座談会の様子

このことから、遺跡と市民との関わりから考える未来の虎塚古墳と十五郎穴横穴群についてな

授の佐々木憲一氏による虎塚古墳の価値について、古墳の構造や横穴墓との関係性を踏まえながら全国の類例を挙げ、その重要性についてのお話がありました。第五講演では、茨城大学人文社会科学部教授田中裕氏による十五郎穴のこれからについて、茨城県内の群集墳と横穴墓群の広がりからみえる虎塚古墳と十五郎穴の価値に触れ、十五郎穴の立地と保存から考える未来の十五郎穴についてのお話がありました。最後には、大澤正吾氏と東京文化財研究所保存科学研究センター長の犬塚将英氏、当公社文化財調査事務所職員の稲田健一が加わり、座談会が開催されました。田中裕氏をコーディネーターとし、各講演内容の補足や、それぞれの遺跡について、これまで携わってきたことで感じた遺跡への思い、



虎塚古墳装飾壁画の展開パネル



グッズ販売

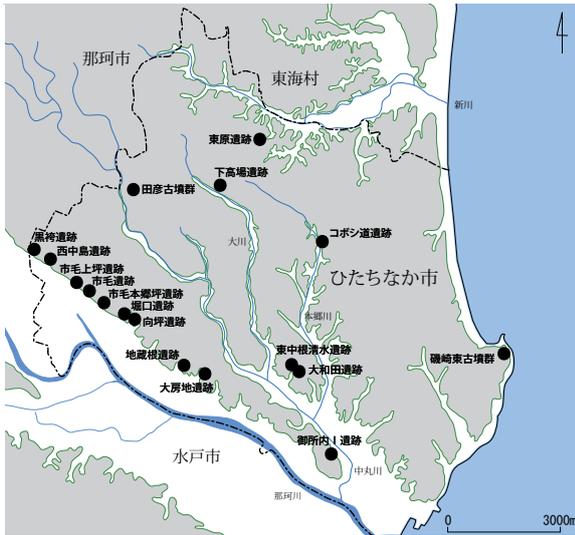


虎塚古墳の保存に関するパネル解説展示



「はははにわ」の展示

ど、約一時間にわたり、自由に話し合いが行われました。その他、会場の外では各遺跡にちなんだグッズの販売や、ひたちなか市誕生三〇周年事業で作成された、那珂湊高校生徒デザインのカプセルトイ「はははにわ」の展示、また文化会館のエントランスでは、ほぼ実寸サイズの虎塚古墳装飾壁画の展開パネルや、虎塚古墳の保存に関するパネル解説展示も実施されました。今回のシンポジウムの内容は後日、記録集として刊行される予定です。(田中美雪)



調査された遺跡の位置



向坪遺跡第8次調査で出土した土器内のチョウセンハマグリ



向坪遺跡第10次調査第2号住居跡完掘の様子

二〇二四年度の市内遺跡は、試掘調査24件、本調査2件の、あわせて26件の調査が実施されました。

試掘調査では、磯崎東古墳群第14次調査で、新たに3基の古墳の石室が確認されました。第2号墳の近くからは、須恵器甕の破片が出土しています。また、大房地遺跡23次調査では、縄文時代の住居跡と土坑と推定される遺構が確認され、早期に属する土器片が1点と中期中葉の後葉の加曽利E式に伴う土器片が複数確認されています。

向坪遺跡第8次の試掘調査では、逆さまに出した土師器の壺の中から、チョウセンハマグリなどの貝類が検出されました。その後実施された第10次の本調査では、古墳時代の住居跡3

基と土坑1基が確認されています。住居跡の1基は、一辺が6m以上になる比較的大型の住居と推定されます。第2号住居跡と第1号土坑からは、剣形の石製模造品が出土し、第3号住居跡からは、石製の白玉が1点出土しています。

市毛遺跡第11次調査では、約40㎡の調査区に9基の住居跡を確認しました。住居跡は、多くが重なり合っており、古いものが新しい住居に壊されていたり、居住スペースを拡張していると考えられるものが確認されています。住居跡からの出土遺物は多くありませんが、土師器や須恵器などが出土しています。また、調査区からは、縄文土器片・弥生土器片が確認されました。

(田中美零)

のぞき見 展示室 その9

今回紹介する資料は、「石匙」という石器です。

石匙は、石の剥片の端に両辺から挟るように打ち欠いてつまみの部分をつくり、その他の縁辺に刃をもつ石器です。刃がつまみから縦に長くのびる「縦型」とつまみから横方向に直角に付けられた「横型」のものがあります。縦型は縄文時代早期に東北北部や北海道の遺跡で出現し、横型はその後に西日本で出現します。前期になって横型が関東でもみられるようになります。「匙」という名前から、スプーンとしての用途が想像されますが、動物を解体するナイフや、皮をなめす等の道具として使用されたと考えられています。また、突起の部分は携帯するため紐などを括りつけたと推定され、実際に紐や固定のためのアスファルトが付着した石匙が出土した例もあります。「石匙」という名前が付いたのは、江戸時代に金石学で著名であった木内石亭の著書である『雲根志』に「天狗の飯匕(さじ)」という俗称で紹介されたことが由来となっています。

市内では、縄文時代前期の遠原貝塚で2点、後期の太田房貝塚で1点(全て横型)の石匙が出土しています。

(田中美零)

2024（令和6）年度市内遺跡調査一覧表

No.	遺跡名	回数	所在地	種別	時期	遺構・遺物
1	ひがしなかねしみず 東中根清水遺跡	8次	中根	試掘	4月	ピット2基を確認。出土遺物なし。
2	ひがしはら 東原遺跡	11次	高野	試掘	4月	土坑2基(時期不明)を確認。出土遺物なし。
3	いそぎまむしがしこふんぐん 磯崎東古墳群	14次	磯崎	試掘	5月	古墳の石室3基, 溝跡1条を確認。須恵器が出土。
4	にしなかじま 西中島遺跡	6次	津田	試掘	5月	住居跡3基(縄文1, 古墳2)を確認。縄文土器, 土師器が出土。
5	ほりぐち 堀口遺跡	40次	堀口	試掘	5月	住居跡9基(古墳3, 奈良1, 平安3, 時期不明2), 土坑2基, 溝跡2条, ピット7基を確認。土師器, 須恵器が出土。
6	おおわだ 大和田遺跡	7次	中根	試掘	6月	溝跡1条を確認。出土遺物なし。
7	おおわだ 大和田遺跡	8次	中根	試掘	6月	溝跡1条を確認。出土遺物なし。
8	むかいづぼ 向坪遺跡	8次	堀口	試掘	6月	住居跡3基(古墳)を確認。土師器, 貝類が出土。
9	じぞうね 地藏根遺跡	10次	勝倉	試掘	6月	なし。土師器が出土。
10	しもたかば 下高場遺跡	2次	高場	試掘	7月	なし。
11	いちげかみづぼ 市毛上坪遺跡	38次	市毛	試掘	7月	住居跡2基(古墳1, 時期不明1)を確認。土師器, 須恵器が出土。
12	おおぼうち 大房地遺跡	23次	勝倉	試掘	7月	住居跡2基(縄文), 土坑3基(縄文)を確認。縄文土器が出土。
13	むかいづぼ 向坪遺跡	9次	堀口	試掘	7月	住居跡1基(古墳), 溝跡1条(奈良)を確認。土師器, 須恵器が出土。
14	いちげかみづぼ 市毛上坪遺跡	39次	市毛	試掘	8月	溝跡2条(時期不明), ピット1基を確認。縄文土器, 土師器, 須恵器が出土。
15	いちげほんごうづぼ 市毛本郷坪遺跡	12次	市毛	試掘	9月	住居跡2基(時期不明), 土坑1基(粘土貼り)を確認。土師器, 須恵器が出土。
16	むかいづぼ 向坪遺跡	10次	堀口	本調査	9月	住居跡3基(古墳), 土坑1基(古墳)を確認。土師器, 須恵器, 石製模造品, 白玉, 砥石が出土。
17	ごしやうち 御所内I遺跡	3次	柳沢	試掘	10月	なし。
18	くろぼかま 黒袴遺跡	9次	津田	試掘	10月	土坑1基(時期不明)を確認。出土遺物なし。
19	ひがしはら 東原遺跡	12次	高野	試掘	10月	なし。
20	ほりぐち 堀口遺跡	41次	堀口	試掘	11月	なし。
21	みち コボシ道遺跡	1次	馬渡	試掘	11月	なし。
22	みち コボシ道遺跡	1次	馬渡	試掘	1月	土坑1基(時期不明)
23	ひがしはら 東原遺跡	13次	高野	試掘	1月	なし。
24	たびこふんぐん 田彦古墳群	4次	田彦	試掘	2月	なし。
25	いちげ 市毛遺跡	11次	市毛	本調査	2月	住居跡9基(古墳, 奈良・平安)を確認。縄文土器片, 弥生土器片, 土師器, 須恵器が出土。
26	いちげかみづぼ 市毛上坪遺跡	40次	市毛	試掘	3月	なし。



向坪遺跡第10次調査区



市毛遺跡第11次調査区

昭和四五年、日立市では文化財保護条例が制定されて文化財保護委員会が設置された。そんな中の昭和四六年、日立市上の代に市営住宅団地造成が計画され、志田諄一先生の誘いでその調査に参加した。志田先生を中心に調査団が編成され、教育委員会では川崎松寿、永沼義信さんが事務担当となり、地元出身の大学生を中心に日立一・二高生や茨城キリスト教学園高等学校生なども参加した。調査は七月二〇日から始められ、八月三二日に一応の終結をみたが、その後は遺物の整理作業が細々と行われた。遺跡の現状は、一部耕作放棄された雑草の繁茂した畑で、発掘予定地四三二㎡に遺構検出のため東西方向で幅二m、長さ一〇mのトレンチを三〇本ほど設置して調査を開始した。遺構は南方向に開く浅い支谷周辺に多く検出され、遺構調査と遺構確認のためのトレンチ拡張作業が続けられた。私は志田先生の代行として現地調査を指揮したが、県内では余り経験のない縄文時代中・後期の集落跡の調査であり、我々にとってもかなり難しい調査となった。教育委員会では安易に掘れば良いに考えていたようで、整理についてはほとんど予算化していなかったようだ。各調査区で検出した遺構は拡張して遺構調査を実施したが、住居跡群の外辺部に分布したと想定される貯蔵穴群をほとんど調査しておらず、当時我々の縄文集落に対する認識の低さを示している。

調査期間中、我々は日高小学校跡地の公民館に宿泊し、遺跡まで徒歩などで通った。食事は仕

私的茨城考古学外史—遺跡・人 出会いと別れ—

第11回 発掘三昧への道 県内編6 日立市上の代遺跡・石岡市常陸国分尼寺跡(三次)



上の代遺跡発掘調査参加者



瓦吹 堅

出し弁当だった。公民館には風呂がないため、日高中学校用務員宅の風呂を利用して貰ったが、時々小木津駅近くの民家の風呂を利用することもあった。

調査に参加したのは、金子進・三好清隆(明治大学)・鈴木裕芳(東洋大学)・黒沢彰哉・赤石光資(大正大学)・中村雅利・鶴見貞雄・齋藤礼子(茨城大学)・藤枝典子・佐藤展子(茨城キリスト短大)などの大学生のほか、地元の日立一・二高生や茨城キリスト教学園高等学校生も暑い中参加してくれた。綿引逸雄・今橋浩一・照山量弘・後藤久雄・鈴木正彦・鹿志村則男君達日立一高生は、大学に進学してからも県内の発掘調査に時々参加してくれた。

整理作業も高校生達の協力を得て土・日に実施し、九月頃は旧図書館二階で行った。その後出土品が市立大沼小学校旧体育館に運ばれ、我々整理参加者は大沼小学校まで通うことになった。一二月に事務局の川崎さんから整理作業中止の話があり、後日再開について連絡があることになっていったが、その後連絡はなかった。発掘調査後の造成作業中に、発掘予定地内以外からも遺物や遺構が発見されると大平達夫・綿引逸雄君から報告もあった。

縄文集落調査の未熟さや出土遺物量の多さなども想定外のものであり、反省点の多い発掘遺跡となったが、私は当時ガリ版刷りの『TU NOT E』を参加者達に配布しており、綿引逸雄君が保存していた。それには整理作業の予定日や内容な



上の代遺跡トレンチ発掘状況

どを書き、高校生にあだ名を付けた。そのあだ名の一部を紹介すると、「ウエスタン」「マンダム」「ナチス」「ダンデイ」「ミッキー」などで、彼らとは五十年以上も過ぎたというのに今でもそのあだ名を呼んで交流を続け、私は「ブキサン」と呼ばれている。

昭和四十六年一月六〜一四日、石岡市常陸国分尼寺跡の三次調査に参加した。三次調査は寺域の東限を確認するという目的で実施されたが、明確な東限区画は確認できず、南北棟の建物跡の掘方の一部と、竈に尼寺の瓦を再利用した竪穴住居跡

四棟の調査で終了した。調査担当は水戸市教育委員から派遣された伊東重敏さんで、石岡市では社会教育課の若い職員小松修さんが事務を担当した。小松さんは國學院大學柔道部出身で、大きな体躯は迫力がある体育系の先輩。小松さんとは尼寺調査で初めてお会いしたが、その後舟塚山古墳の調査や昭和五八年から再開された石岡市史編さんの下巻通史編刊行の事業までもご一緒し、現在でもお付き合いを続けている。調査には、山下房子・田宮一典・北村誠・小木香・吉野勢津子君が参加し、宿舎は香丸町にあった亀下旅館。尼寺までは毎日常陸国分寺跡前を通る。当時「花嫁」や「知床旅情」などが流行っており、帰り道に小柳ルミ子の「私の城下町」を小木君がよく口ずさんでいた。一月九日には文化庁記念物課三輪嘉六主任調査官が指導に來られ、調査の後半には山本満男茨城県教育長も視察されて、激励を受けた。門跡での記念写真は、調査区の埋め戻しが完了した後のものである。当時市役所は石岡小学校近くにあり、市役所前の食堂で伊東さんや小松さんとよく杯を重ねた。



常陸国分尼寺跡発掘調査参加者



1973年10月製作 虎塚古墳壁画（鈴木清氏作）

2024年12月11日寄贈

日時 令和6年
10月12日[土] - 12月15日[日]
休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)
開館時間 午前9時 - 午後5時 (入館は午後4時30分まで)
入場無料
場所 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
〒312-0011 茨城県ひたちなか市中原 3499
☎ 029-276-8311

土器に記された 古代人名

はせつつかべのいが
(部) 丈マ伊賀

ひたちなか市武田石高遺跡から出ました
須恵器の底に書かれていた人名
(『武田石高遺跡』報告書 より)

公益財団法人
ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
1CASE MUSEUM vol. 62



ワンケース・ミュージアム62は、ひたちなか市内から出土した墨書土器から、古代の人名と思われる資料を選び出して展示しました。

墨書土器は、鬼や神々に賄い(まかぬい)を捧げて災いを逃れる祈願に用いられ、記された人名は祈願者の名前であると考えられています(平川二〇〇〇)。

展示した「丈マ伊賀」(はせつつかべのいが、石高遺跡、9世紀前半)ですが、「マ」は「部」の略字で、「丈マ」は丈部という氏族名をあらわすウジ名です。その下の「伊賀」は名前です。『和名類聚抄』(平安時代の辞書)には、栗のいがのことを「伊賀」と書いていますので、丈部伊賀の「伊賀」も、栗のいがを意味したのではないのでしょうか。

古代では子供が亡くなることも多かったため、とげとげた栗のいがの名を名前に付けることで、幼い子供が鬼神に連れていかれないようにしたのかもしれない。史料をみると「調

君小屎(つきのきみおぐそ)のように、名前に「屎」(糞のこと)のつく人名がありますが、これも「伊賀」と同じ理由と思われる。

古代人名には、「我孫伊賀麻呂」(あびこのいがまる)や「新田部伊賀麻呂」(にいたべのいがまる)のように、「伊賀」を名前に付ける例がいくつもあります。石高遺跡から出土した「丈マ伊賀」も、「丈部伊賀麻呂」(はせつつかべのいがまる)という名前の「麻呂」を省略しているのかもしれませんが。

また「真新殿」(ましんどの、石高遺跡、9世紀中葉)という墨書ですが、神奈川県居村B遺跡4号木簡に記された「市田殿」「吉成殿」「新勾殿」などと同様に、地域の有力者の名前と思われる。「真新殿」は石高遺跡の大きな住居から出土していますので、有力な家長の名前である可能性があります。また「真新」は、古代銅印にみられる人名の省略方法を参考にすると、例えば「真髪部新麻呂」(まかべのにいまろ)のような人名の、氏と名の一字ずつを組み合わせた字名であったのではないのでしょうか。ちなみに「真髪部」「新麻呂」とも、史料にみられるウジ名・名前であり、真髪部は常陸国に居た部民です。

「真新殿」を「真髪部新麻呂」のような人名を略したものとみるならば、「真大里」(まのおおさと、下高井遺跡、10世紀前半)も、「真髪部大里」(まかべのおおさと)のような人名を略したのではないかと想像されます。八世紀初めの衛門府(宮城門の守衛などを担当した官司)の仕丁(労役に従事した

成年男子)に、「大里」という名前が確認できますので、「真大里」を人名とみることもできそうです。

「尾足」(おたり、原前遺跡、9世紀前半)という墨書は、史料に同じ名前を見つけることはできませんでしたが、「魚足」・「嶋足」・「豊足」・「公足」など、「く足」とする名前は多数ありましたので、「尾足」も人名でよいと思われます。

なお墨書土器は多くが漢字一文字です。したがって、その文字は人名かどうかわかりませんが、「富」(とみ、石高遺跡、9世紀中葉)と記された文字などは、史料に「富女」や「富麻呂」といった、「富」がつく人名が多いことから考えると、やはり名前の一部なのかもしれません。(佐々木義則)

参考文献：平川南二〇〇〇『墨書土器の研究』、奈良国立文化財研究所「木簡人名データベース」、『日本古代人名辞典』吉川弘文館、押木弘己二〇一五「貞観」紀年銘木簡と伴出土器の様相『考古論叢神奈河』第二集



展示のようす

文 埋 センターの 日々 2024 後期

10月

1-3 御所内 I 遺跡試掘調査 / 10-16 黒袴遺跡試掘調査 / 13 ふるさと考古学⑦「みんなの十五郎穴! - 遺跡の魅力PR -」(講師: 鈴木康二氏・さかいひろこ氏) ↓



1-12 ワンケース・ミュージアム / 62 『土器に記された古代人名開始』 / 22 千葉県我孫子市いきいき会 団体見学 / 23-25 東原遺跡試掘調査 / 24 十五郎穴横穴群出土遺物 茨城県指定文化財諮問案件現地調査・市生涯学習講座1「虎塚古墳と十五郎穴」 / 27 ふるさと考古学⑧ 「十五郎穴でアート!」(講師: 安芸早穂子氏・さかいひろこ氏) / 31 『埋文だより』第51号刊行・虎

塚古墳石室公開前点検

11月

第5回 Kids 考古学新聞コンクール受賞作品巡回展 ↓



12-22 堀口遺跡試掘調査 / 1-6 ニュー虎塚古墳一般公開(ひ

たちなかユネスコ協業内ボランティア) ↓



8 勝田中等教育学校一年生 ↓



茨城県高等学校教育研究会歴史部見学 / 9 ふるさと考古学⑨ 「壁

画の考古学」(講師: 山田美央氏・山田梨央氏・さかいひろこ氏) ↓



10 クラブツーリズム団体見学 / 14 ワールド航空サービス・千

葉県野田市風土記を楽しむ会団体

見学 / コクラブツーリズム団体

見学 / 19-20 コボシ道遺跡試掘調査 / 20 はまぎくカフェ講座「虎塚

古墳と十五郎穴」 / 21 市生涯学習講座 2 「海を望む古墳群 ひたちなか海浜古

墳群」 / 22 栃木県日光市藤原地域

自治会公民館連絡協議会団体見学

23 サイクリンDE ひたちなか 2024・ふるさと考古学⑩「フイー

ルド探検」(講師: 矢野徳也氏・さ

かいひろこ氏) ↓



虎塚古墳 花便り



36 リュウノウギク

今回ご紹介する花は、虎塚古墳よりも十五郎穴横穴群でよく見かける「リュウノウギク(竜腦菊)」です。リュウノウギクはキク科キク属の多年草で、本州から四国・九州の一部に生育するとされています。名前の由来は中国から伝わった竜腦という香料に似ていることに由来するとされます。背丈は三〇〜八〇cmで、まっすぐに立ち上がることは少なく斜めになっています。葉は、先がとがる楕円形で、三つに浅く裂け、裏面はT字状の短い毛が密集し灰白色をおび、ふちはギザギザがあります。花は白く、径が三〜五cmほどで茎の先端に単独か二〜三個つきます。花の咲く時期は一〇月〜一月頃です。

自然地形では崖地に出現することが多く、石灰岩地にもよく見られるそうです。十五郎穴横穴群は、まさにその条件にかなった場所で、毎年秋に出会うことができます。菊なので、お墓にびっぴりのお花だと思っています。(稲田健一)



2010.11.06

／28 神奈川県横浜古代史を学ぶ
会団体見学・虎塚古墳石室公開後
点検

12月

「ふるさと考古学⑩」「楽しい考古学」(講師:さかいひろ二氏)／5
栃木県上三川町団体見学／「ふるさと考古学⑪」「やっぱり楽しい考古学」(講師:さかいひろ二氏)／



／15 ワンケース・ミュージアム
62「土器に記された古代人名」終了
／19 市生涯学習講座3「古墳時代の
はじまり」／26 十五郎穴横穴群出土
遺物が茨城県指定文化財に／27
大田区立郷土博物館遺物返却

1月

7-28 コボシ道遺跡試掘調査／9」



WAY十五郎穴の取材(左上)／16
市学習講座4「弥生時代の墓から出土す
る玉製品」／21-24 東原遺跡試掘調
査／28 駐車場改良工事」



2月

4-6 田彦古墳群試掘調査／8 十五
郎穴横穴群国指定・虎塚古墳国指
定50周年記念シンポジウム「虎塚
古墳と十五郎穴の今そしてこれか
ら」開催」



／8- 第21回企画展「裝飾古墳の
世界2」開始／18- 市毛遺跡本調
査開始／15 ひたちなか市の考古
学第17回①「壁画と保存」(講師:
谷口陽子氏)／19 常陸大宮市老
人会見学・十五郎穴説明看板リ
ニューアル(右下)／20 市生涯学習

講座5「ひたちなか市の生産遺跡・原の寺
瓦窯跡」／22②「東北地方の裝飾古
墳」(講師:山田隆博氏)・ひた
ちなか市稲田地区土曜会见学



1③「裝飾古墳と世界の裝飾墓」(講
師:河野一隆氏)／8④「茨城の装
飾古墳」(講師:福田健一)／9 市
青少年課主催射爆跡地観察会での
説明／11-13 市毛上坪遺跡試掘
調査／20-23・27-30 虎塚古墳一般
公開／21 市毛遺跡本調査終了／
29 ユーラシア旅行社見学／29・30
クラブツーリズム見学／31 『埋文
だより』第62号刊行

10月 27 237 4 (0) 70 (0) 307
11月 26 1534 11 (1) 544 (127) 2078
12月 23 184 6 (0) 90 (0) 274
1月 23 203 0 (0) 0 (0) 203
2月 24 261 4 (0) 139 (0) 400
3月 26 1087 5 (0) 171 (0) 1258
合計 149 3506 30 (1) 1014 (127) 4520
()内は学校数

入館者状況 (2024.10.1.～2025.3.31)

月	開館 日数	個人		団体		計 (人)
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
10月	27	237	4 (0)	70	(0)	307
11月	26	1534	11 (1)	544	(127)	2078
12月	23	184	6 (0)	90	(0)	274
1月	23	203	0 (0)	0	(0)	203
2月	24	261	4 (0)	139	(0)	400
3月	26	1087	5 (0)	171	(0)	1258
合計	149	3506	30 (1)	1014	(127)	4520

()内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は「市報ひたちなか」及び下記のホームページでお知らせします。
<https://hitachinaka-maibun.jp>

編集後記の 虎の子

二〇二四(令和六)年度は、ひたちなか市誕生三〇周年記念事業が数多く企画された。その中には文化財に関係するものもあり、そのいくつかを紹介する。

「ヤーンボミングdeひたちなか30th」というみんなで集まって編み地を編んで繋ぐワークショップでは、虎塚古墳の壁画を題材とした作品が含まれており、一二月後半から二月初めまで昭和通り沿いの街灯を彩った。

二〇二五(令和七)年一月一日からは、市や商工会議所の職員と県立那珂湊高校の生徒達が、大平古墳群黄金塚古墳出土の県指定文化財「乳飲児を抱く埴輪」をベースに、ご当地デザインのカプセルおもちゃ「はははにわ」を発売した。この埴輪は、一月現在福岡県の九州国立博物館の企画展に旅しており、今後ますます人氣が高まる埴輪となろう。

そして、特集を組んだ十五郎穴横穴群国指定・虎塚古墳国指定五〇周年記念シンポジウムも記念事業の一つである。

今後は、この盛り上げりを継続して、市内の文化財について連携を組みながら広報や活用・展示を行っていききたい。



ひたちなか埋文だより 第62号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2025年3月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市申根3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

ひたちなか市埋蔵文化財調査センターホームページ



*表紙の実習生は、野村萌々花さんです。